

O&Mスキルの必要なクライアントに対する 共同訓練前に行うプログラムについて — Aさんの事例から —

堀江 智子（公益財団法人日本盲導犬協会）

1. はじめに

視覚障害者が盲導犬を取得する時、日本盲人施設福祉協議会の規定により、新規希望者は、約4週間の訓練を受ける必要がある。これらの期間を当協会では「共同訓練」と呼んでいる。

日頃、白杖歩行をしているクライアントであっても、慣れない訓練センターでの合宿生活や新たな盲導犬との歩行訓練に加え、犬の世話や行動管理を行うなど、体力精神ともに負担となる。今回、単独歩行経験がなく、視覚リハの訓練経験のないAさんに対し、共同訓練前に実施した事前プログラムについて報告する。

2. クライアント（Aさん）概要

男性、56歳（左右）0.06、視野損失左右95%以上、錐体ジストロフィー。

平成18年ごろから見えにくさを感じ、翌年、障害手帳5級となる。

平成20年に見えにくさから仕事を退職し、地域の訓練施設で白杖の紹介を受けるが、白杖の必要性を感じられず継続的に訓練は受けなかった。

平成23年3月に2級となり単独での外出が困難となり、ほとんどを家の中で過ごしていた。

平成24年7月に知人から盲導犬について紹介され、当協会が実施している1泊2日の盲導犬説明会に参加後、当協会に盲導犬貸与希望を申し込む。退職後体重が10kg増加、痛風の加療中である。

2.1 クライアント評価

・外出が困難になってから約1年間、日中の多

くを家の中で過ごしており、視覚障害の状態で行く経験や状況判断の機会が少なかった。

・自宅周辺は田畑の多い地域で、用水路や蓋のない側溝、道路の端が崖といった環境が多く、足を踏み外した経験もあり、屋外の歩行に対して恐怖感があった。

・視覚以外の感覚を利用し情報を収集して活用する視覚リハのスキル不足に課題があった。

・体力が以前に比べて低下していることを実感していたが、手引き歩行では速歩（95～100m/分）のスピードを盲導犬歩行で実現したいと希望した。

・通常、共同訓練ではモビリティを中心に、犬の世話や行動管理が単独でできるように訓練を行う。今回、上記の状況を踏まえ、オリエンテーションとモビリティに関するスキルと手による確認などの視覚リハスキルを組み合わせた訓練を事前に行い、実際の共同訓練では、単独歩行の経験を十分に積めるようにプログラムを計画した。

3. 方法（プログラム内容）

場所：日本盲導犬協会富士ハーネス敷地内、静岡県富士宮市内、富士市内、自宅周辺

回数：計3回（合宿、現地）

3.1 1回目（5日間・合宿・現地）

・手による確認

自動販売機、スイッチ類、鍵、机の物の位置、座席の確認、バス車内の手すりや昇降ボタンの探し方、電車切符販売機の利用、普通車昇降

・手による移動の方法



写真1 車庫に停車中のバスを借り、車内を手による確認で移動する

- ・遮光眼鏡のフィッティング
- ・援助依頼技術
- ・車音を利用した横断判断
- ・手引き歩行（手引きの受け方）
援助依頼で手引き歩行を応用
- ・白杖の選定、基本操作と歩行

側溝の伝い方、進行方向を維持した横断、一旦入りこむ交差点横断（SOC）、階段、エスカレーター、エレベーター、ホーム歩行、電車バス利用、自宅周辺の白杖歩行訓練。特に電車乗降に関して、自宅の最寄り駅は、ホームと車体が離れていると同時に、車体が高くホームが低い状態で、車体が斜めになって停車する駅を利用するため、電車乗降時の手続きと体重移動についても練習した。

- ・ハーネスワークの導入（犬なし）

左手でハンドルの情報をとる、ハンドルの情報から人の左足を犬に沿わせたり、右に移動する動作の反復練習。ハンドルから歩行スピードが遅くなったことを感じ、人は止まる準備をする。



写真2 人が左手にハーネスのハンドルを持ち、指導員がハーネスの胴輪を持って犬の歩行を再現する

- ・立ち位置の確認

盲導犬歩行の基本ポジションで人がハーネスを持った時の犬の前脚の位置は、白杖を構えた時の石突が地面に着地している石突の位置と同様。基本ポジションでは、犬の前脚の位置は、人の左足を軸にして右足を1歩踏み出した位置。Aさんの白杖の石突着地位置は、2歩踏み出した位置であることを確認。犬の鼻先までの位置は、半歩踏み出して腕を伸ばした手の位置。



写真3 人が壁を左にして横向きで立ち、左壁側にハーネスをつけた犬、人の右手に白杖を持ち、人の立ち位置、犬の前脚、石突の位置を示した

3.2 2回目（5日間・合宿・現地）

- ・ハーネスワークと複数のPR犬での歩行（以下「盲導犬歩行」という）で課題を実施する。
- ・軌跡を意識した直線歩行

盲導犬歩行は、主に道の角から角がランドマークとなり移動する。途中の障害物を回避をしたとしても、歩いてきた軌跡と向かう進行方向を意識したオリエンテーションが重要になる。

- ・すみきりの紹介と角の情報

角がすみきりになっていること、道路構造について紹介。白杖で角を発見する際、人は進行方向を維持したまま白杖が振りきれれることを確認することと同様に、盲導犬歩行ではハーネスを持つ左手首が開くことをキャッチし、腕が左に少し開く状態を維持して停止する。この時、すみきりの壁に沿って犬が左に向いた方向と一緒に人が立ち位置を変えてしまうと、進行方向を見失いやすく、地図的操作や横断手続きでのつまづきの原因となる。



写真4 白杖歩行で角の発見時に人は進行方向を維持する



写真5 盲導犬歩行で角の発見時に、人は進行方向を維持する

・視覚情報以外の情報を利用する

ドライブウェイ、道の勾配、環境音、道路環境情報を取り、ランドマークや横断、地図的操作に利用する。

3.3 3回目（3日間・合宿）

・犬の行動管理の導入

リーシュワーク（犬なし）によって、左側にいる犬の首輪近くのリードを左手で持った時、このリードから犬の情報を得るために左手で反応をとらえる練習。加えて、リード情報をもとに、必要な命令語をつけていく。

・犬の世話や用具等の使い方、時間管理

犬具の整理整頓、次に使う時に使いやすいように工夫する。犬の状態や自分の用事を考えながら、排泄や訓練時間までにしておくことなどの時間配分について体験する。

・ルートや方角、方法を言語化する



写真6 人がリードを持ち、指導員が犬の動きを再現する



写真7 犬のフード量を手で確認する

動作や方向を言語化することで、整理しやすく、訓練中のつまづきも共有しやすくなる。また援助依頼や他の人と共有できる情報になるため、ルートやランドマークを言語化して練習しておく。その際、東西南北やクロックポジション、角度を動作と連動させておく。

4. 考察

・手の情報を利用したスキルの向上によって、歩行時以外の犬の行動管理や定位を保つことに意識することができた。リードを持つ左手から犬の動きを知るスキルを上げておくことで、犬の学習や犬と人の関係を作るのに必要な即時強化を行う際に有効だった。

・通常の共同訓練で初期段階に行う軌跡は、犬の行動や歩行姿勢に慣れていない状態では、複数のことに意識しながらの課題になる。今回、白杖歩行とハーネスワークを中心に単科の課題にしたことで、実際の共同訓練では定着が早かった。

- ・自分の立ち位置と犬の前脚の位置、自分と犬の鼻先の位置を知ること、犬の減速、停止するための速度を意識し、ハーネスの情報や犬の動きを注意してとらえようとする意識につながった。当初、Aさんは歩くスピードは速歩を理想としていたが、情報を処理して歩くには速すぎることを実感し、自分にあった適度なスピードを知ることができた。
- ・白杖での単独歩行を自宅でできるようにしたことで、情報をとって歩く経験を増やし、歩行訓練を受けると単独歩行が可能になることを実感できていた。
- ・共同訓練を担当する研修生（盲導犬歩行指導員養成：GDI キャデット）の養成に役立った。担当したGDI キャデットは、Aさんに最も効率良くスムーズに課題を定着させる仕方を事前

に知ることができた。また、改めて盲導犬歩行に必要な課題を分析し、課題のシェーピングについても理解を深めることができた。

5. まとめ

今回、単独歩行の経験のないAさんに対し、共同訓練前に「盲導犬歩行に慣れてもらう」ということだけではなく、今一度、視覚リハのスキルが盲導犬歩行や生活に関わるスキルとどのようにつながり、モビリティと犬をどのようにつけていくのかを再確認できた。クライアントの歩きたい気持ち、歩く喜びを実現するために、一人一人にあった訓練の進め方、課題理解や定着の進め方について、更に探究していきたい。